

KSKP Threshold

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ ニュースレター Vol.12

～ずれっしょろど～(出発点)

神戸薬物・アルコール依存リハビリテーションセンター

スレッシュョールドとは、新たな出発点、飛び立つ場所という意味です

Drug Addiction Rehabilitation Center

DARC



私たちの旅は続く

春を迎えました。毎朝阪神電車にゆられながら、六甲山を眺めて通勤しています。最近ではいろいろなところに講演や出張のために経費削減(車を買う余裕がないので)オートバイを購入し、春の匂いや風を感じています。電車から見る六甲山は本当に四季折々で、毎日違う景色を見せてくれます。冬でも何通りもの顔をみせ、夏でも何通りもの風情を魅せてくれています。オートバイに乗っていても、春の匂いや冬の匂いを感じ、太陽の暖かさを冬には感じ、夏には風の気持ち良さを感じます。時に、自分の若かりし頃に感じた感覚を取り戻す時もあり、それがとても心地よく感じたりもします。私は特に、そのような魂、スピリチュアルな部分で感じる感覚が、薬物依存のせいなのか、わからなくなっていました。回復の中でそんなものを取り戻していきました。特にこの神戸に来てからは、季節ごとに多くのものを感じる日々を過ごしています。もちろん仲間とともに。ダルクにつながっている仲間たちも、それぞれのこれまでがあり、それぞれの回復の道があります。今はその道さえも失っている仲間もいることでしょう。その中で失敗もあります。ダルクにつながってからの失敗と、それまでの失敗では大きな違いがあります。それは、前者は一人孤独な失敗でした。でも今は違います。失敗した時に手を掴んでくれる仲間がいます。私は回復の中で、これまでもたくさんの旅をしてきました。非常に効果がありました。それは、仲間に出会っていく旅だからです。私たちの薬物が止まっているのは奇跡なのです。その奇跡と奇跡が出会っていくことがまさに奇跡なのです。薬物依存症にならなければ出会うことのなかった仲間にも今年も出会っていく旅を神戸ダルクは続けていきます。

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ 代表理事 梅田靖規

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ

自立訓練(生活訓練)神戸市障害福祉サービス事業所 デイセンター リカバリー

〒651-0068 兵庫県神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ 2F

TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741 e-mail kobe.darc@gmail.com

www.kobedarc.org

神戸ダルク

検索

自らが変えられる経験 ～DARC との出会いを通して～

賀川記念館 神戸イエス団教会 牧師 上内達子

私は薬物依存症の方との関わりがほとんどありません。これまでの人生で、ただ2度だけ、ソーシャルワーカーとして薬物依存のクライアントを担当したことがある程度でした。日本に出稼ぎに来ていたフィリピン人女性エンターティナーが、母国へ帰国後、その社会復帰のお手伝いを行っていました。30年近く前のお話です。(当時の日本では「じゃばゆきさん」との蔑称で呼ばれていたことを覚えておられる方もいるのではないのでしょうか。)その時に、薬物依存で精神障害を患い自死願望の強い方を担当し、また、日本の性産業での働きが過酷で、酒・タバコ・薬物で気を紛らしているうちに、依存症となり、精神を壊して強制送還された女性を担当しました。一人は最終的に亡くなってしまいましたが、もう一人は、家族の支えと日本のNGOの治療支援により回復し、今では、ご家族で平和に暮らしておられます。何百とあるケースの対応に追われていた当時は、薬物依存との関係をじっくり考えることもなくやり過ごしてしまいました。

ところが、梅田靖規さんと知り合うようになって、急速に薬物依存の現実との距離が縮まっていったように感じます。それまで、気になりつつも、関わりをもつ機会がありませんでしたが、2年前の2017年4月、共通の友人を介して、賀川記念館にある天国屋カフェが、ナルコティクス・アノニマスのミーティング会場として提供されることになったのです。

天国屋カフェは、第2社会福祉事業といわれる分野に属する隣保事業で、一人ひとりの人生をサポートする地域包括支援の機能を果たすための実践の場所です。様々な背景をもつ人が行き交い出会うことや、生きづらさを抱えた方が心休まる居場所を見つけることを目指しています。そこに、神戸ダルクヴィレッジの関係者が加わってくれることは、居場所をさらに変化させていくことに大きな力を発揮してくれると期待しています。

私は実際には薬物依存症のために役立つ働きは何もしていないので、皆さんに分かち合う素晴らしい話はありません。しかし、この2年間、NAミーティングと梅田さんの働きを傍らで見て感じてきたことは、自分の生き方が変えられてきた過程でもありました。私自身の意識や感性を解放してくれていると思うのです。

毎週土曜日の夕刻にNAミーティング開催のために、場所を開放することは、場所の提供という単純なものではなく、常に土曜日の夕方に薬物依存という現実を意識するということなのです。参加される方々のお名前も知らないし、実際に会うこともないけれども、毎週休まず来られているという事実の中に、皆さんの心の一端を見る思いです。その懸命な姿が、わたしの心も同時に励ましてくれているように感じるのです。みなさんが帰宅された後、がらんとしたカフェの最終戸締まりをする時、今日も無事1日を終えられたことに安堵します。薬物依存症の方が土曜日のNAミーティングに出席することは、その日1日を生き抜くことの証しだと知らされたからです。土曜の夕刻は、単なる場所貸しの夕方ではなく、一人ひとりの生きるモーメントの夕刻であると感じさせられています。

他の曜日も、あちこちで、会場を設けておられますが、そのことで、開催した地域にそれぞれ潜む薬物依存症の方が、NAミーティング実施の事実を知る可能性が大きくなることにも気付かされました。そして、仲間に加わりリハビリにつながることで、仲間の輪を広げ、各地域に一つの互助コミュニティを形成していると考え、鼓動が高まります。また、「お誕生日」をみんなで祝い、喜びを分かち合うということもわたしには新鮮でした。それが、この地上に生を受けた日ではなく、薬物フリーを実行した日を生まれ変わった新しい誕生日として祝っていると聞いて、本当に素晴らしいと思いました。ミーティングの様子を知るにつれて、夕刻ミーティングに場所を貸すことが億劫だったわたしは、その感じ方そのものが大きな間違いだと気付きました。一人の人生が救われるかどうかのワンチャンスになり得る一夜なのだと思うと、この一夜が毎週続く事が尊く感じられるのは、きれいごとなのでしょう。このような関わりを1年ほど経て、2年目は、ダルクのメンバーに秋のバザーのお手伝いをしてもらいました。

また、薬物を取り巻く現状について理解を深め、正確に知らせるために、神戸ダルクヴィレッジ代表の梅田さんに、講演をお願いしました。梅田さんが講演の中で指摘されたことは、ダルクの仲間うちでは当然の事かもしれませんが、薬物依存とは関わりのない一般市民にとっては、本当に「目から鱗」的な指摘でした。地域の中でますます適切な理解が広がって、薬物依存からのリハビリが容易になるように願います。印象に残っている講演内容は、「薬物依存は病気である」ということ。薬物依存は治療する事柄であって、法的な罰則では解決しないのだと訴えておられた事でした。わたしの一般的な市民にとっては、つい「犯罪」という視点から、薬物の



売買などと薬物依存を混同してしまう傾向があるので、病気であるということを理解するのは薬物依存に関わる大切な一歩に思えます。さらに、梅田さんのフィリピンでの研修経験を通して語っておられたことを興味深く聞きました。貧困層がシンナーのような安価な麻薬の代用品を使って依存していく要因は、空腹を紛らすためだということでした。同じ地球上に暮らす者としてとても悲しいことです。彼ら／彼女らがなぜ薬物を使ってでも空腹を凌ごうとするのか？人間生存のより根本的な問いに答えを出して行く必要があると感じました。それは、薬物依存の当事者に問われている問いではなくて、むしろ、わたしのような一般社会に暮らす一人ひとりにこそ問われている問いの筈です。梅田さんの講演で、薬物依存のことだけでなく、一人ひとりが自分らしく生きる事の大切さを教えられました。自分らしく生きるためには、他者との関係が豊かにつながり合っていないと実現できないと同時に学びました。

最後に、梅田さんの依存に苦しむ仲間への想い入れが半端ないことを思い知らされたので、ここに分かち合いたいと思います。1月の真冬の最中、その日の午前中フェイスブックで、梅田さんが肺炎のため急遽入院されたことを知りました。その日は土曜日で、もちろん NA ミーティングはお休みとしました。それにもかかわらず、重病で入院しているはずの梅田さんが、極寒の中で玄関口に立っておられました。驚いて訊ねると、「ミーティングがないことを知らない人がいるかもしれないし、今日のミーティングに初めて参加しようと来た人は、次週は来ないかもしれない。そのつながりを逃したくないのです」とおっしゃいました。裏切らない。このミーティングでの出会いが、すべての回復の可能性に開かれています。

ダルクヴィレッジとの出会いを通して、自分自身の社会への視点が変えられ、生き方に大きな影響を受けていることは確かです。出会いに感謝です。

体験談

希望になる トシ



こんにちは、薬物依存症のトシです。私は 2018 年 6 月に覚せい剤使用事犯で逮捕され、1 年 8 ヶ月の判決を受け、今年の 2 月 6 日に神戸刑務所を仮出所し、神戸ダルクにお世話になり 3 ヶ月が過ぎました。

私は現在 58 歳になるのですが、16 歳の時に覚醒剤を覚え、その後も覚醒剤や大麻等の薬物が約 40 年もやめられなくて、その間に刑務所に 4 回、精神病院の閉鎖病棟にも 1 回入院しています。

そして今から約 6 年前の 52 歳の時に 3 回目の刑務所を出所した時に、私の嫁さんも私が服役して 3 年目に覚醒剤使用で逮捕され、和歌山刑務所で服役していたこともあって、一人で寂しさを紛らすために、やはり覚醒剤に手を出してしまい、それを知った嫁さんからの強い勧めもあり、奈良にある薬物依存所のリハビリセンターに入寮し、そこで 2 年間、今までの薬を使う生き方ではなく、薬を使わない新しい生き方をするための回復の 12 ステップに出会い、自助グループである NA のサービスにも積極的に取り組んでいました。その後、いろいろな事情があり、木津川ダルクに移り、そこで 1 年お世話になり、そこから京都にある介護士になるための学校に 6 ヶ月通わせてもらい、介護士の資格を取得して、いよいよ奈良のリハビリセンター時代にスタッフをしていた私のスポンサーが営んでいた障害者の訪問介護の事業所に勤務し始め、住まいも大阪に移し、一人暮らしを謳歌し、順風満帆の生活を送っていたのですが、その頃、自分自身はもう大丈夫と慢心していました。そしてその矢先に同じ NA メンバーとの女性の問題で寂しく思う出来事があり、その寂しさを受け入れることができずに、ただそれを紛らすために 4 年近くのクリーンがありながらも 1 回くらいなら大丈夫だろうと覚醒剤を使ってしまい、やっぱり 1 回で終わることなくお金の続く限り連続使用に陥り、もう生活がどうにもならなくなりしばらくして逮捕され、今回の 4 回目の刑務所に行くことになったのです。



そして服役中に、今後自分自身がどのような生活をし、どのように生きていけば良いのかと考えた時に、やっぱり私は薬物を使わない生き方をしたいと思い、旧知であった神戸ダルクの代表であるウメさんにお手紙を出して身元引受人のお願いをし、仮釈放で前述しました通り、神戸ダルクに入寮して 3 ヶ月が過ぎました。

今は神戸ダルクに来たことを本当によかったと思っています。それは、神戸ダルクのプログラムももちろんですが、一緒に回復を支え合える仲間と出会えたからです。本当にそのことを心から感謝しています。これからは残り少ない人生を一日一日大切に生き、私のように何度も刑務所に行ったとしても回復して幸せな生活が送れるのだという希望となる存在になれたらいいなあと思っています。



再出発 タカ

みなさんこんにちは、依存症のタカです。私のニュースレターを見て、今、えっ？と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、そのとおりです。去年まで群馬ダルクで大変お世話になり、今年に入って、リラプスをしてしまい、この神戸で一からやり直しを行って3ヶ月が経とうとしています。自分の経験で少しでも希望が伝わればと思います。私は、執行猶予、保護観察処分、嫌々ながらダルクへと繋がり、ブーさん、ショーンさん、西さん、仲間達のおかげで、自分の問題を学び、そして厳しい生活訓練のすえに、仕事にもつけ、アパートでの一人暮らし、毎日、群馬ダルクで夕食をいただきてもらい、仲間とのスキンシップも取りながらすごく楽しい生活をしていました。しかし、ここからが自分の問題でダルクでの5年の経験。もう自分は大丈夫だ！！と、どんどん高慢になっていき、仲間を裁き、そんな自分にも気付いていない。今になって考えてみると、あの時、この時、仲間たちは教えてくれていたなって思います。正直、1日でも早く群馬ダルク、そして両親への埋め合わせと焦っています。今までのブーさん、ショーンさん、西さんの言葉が頭からはなれません。そしてその言葉の意味を胸にこれからは神戸ダルクで頑張っていきます。

神戸ダルクへ繋がり再出発となりましたが、後悔はありません。逆に感謝です。人は「あの頃に戻れたら」とよく思いますが、今までの経験で「こうすればよかった、ああすればよかった」がもう1度出来、凄く力になっています。リラプスした事で自分を大事にする事、仲間を大切にすること、そして優しさに気づかされた気がしました。5年もかかりましたがウェルカムの意味もようやくわかりました。自分は重症です。自分の回復に一生ダルクが必要です。楽しく生活、真剣にプログラム。かっこいいエイサー太鼓をモットーに新しい生き方にかえていきたいと思います。まだまだ長い回復の道、ウメさん、神戸ダルクの仲間、どうぞよろしくお願い致します。すべてに感謝。



この度2月より神戸ダルクヴィレッジでスタッフをさせて頂いているシモです。

僕自身ダルクとの関わりは8年前の11月に矯正施設から出て来て京都ダルクに繋がった事から始まりました。その頃には想像する事すら出来ない現在があります。

8年前の自分は、笑う事もままならなく僕の事を信じ続けてくれていた母に対して申し訳なさからダルクへ繋がりました。人を信じる事など到底出来ない自分に対しダルクの沢山の先行く仲間やスタッフは見返りも求めず支えてくれました。その頃実家へスタッフが電話をしてくれたのですが、父が出て僕の名前を聞いて「俺には関係ない、知らん」と電話を切られました。落ち込んでいる自分に、周りの仲間たちは何も言わずいつも通り接してくれたのを覚えています。ただ、実家に預けていた息子に対しての罪悪感から自分は、楽しんだり、笑ったり、幸せになるなんて許されないと思い込んでいました。ダルクでの生活はその事で最初は本当に笑う事が出来ませんでした。そんな僕にスタッフの一人が、「息子の事幸せにしたいか？それならまずお前が幸せにならんと誰も幸せになんか出来へんぞ」と「自分が笑えてないのに誰かを笑わせるか？」と言ってくれました。

今思えば、その言葉が僕の回復の始まりだと感じています。

その後入寮期間を終え一人暮らしが始まり利用期間も後僅かになった頃、利用が終われば僕は何をすればいいのかわからなくなっていました。そんな僕に施設長から、ダルクの手伝いをしないか？と声を掛けてもらいました。「但し条件がある」と、それは外部との関わりを持つという事。それから僕はコンビニでアルバイトをする傍らダルクの手伝いをしていました。そのコンビニで店長が不在になり、会社の部長さんからうちの社員にならないかと声を掛けて頂きました。アルバイトの履歴書に書いていなかった事実を話すか悩みましたが、部長に時間を作ってもらい全て話しました。その部長は「正直に言ってくれてありがとう。過去は過去、今は今のあなたを見て誘ったのだから問題ないよ」と言ってくれました。そこからはコンビニ店長として社会に出ていました。しかしダルクの仲間達から離れ仕事ばかりになった自分には、薬こそ使いませんでした。病的な行動が出続け、自分自身で気付かずに死への階段を下り始めていました。そんな僕を助けてくれたのは、主治医の先生とダルクで出逢ってきた仲間達でした。その頃は結婚もしていて奥さんのお腹には赤ちゃんも授かっていました。それでも僕の病気は気付かないうちに死への階段を下り始めていたのです。その後は仲間の中に戻り休養を取って、仲間が居る職場でアルバイトをし過ごしていました。

そして今年に入って、神戸に引っ越しをする事になり、僕自身幾度も仲間に助けられて命拾いしてきた事もあり、少しでも仲間の役に立てるのならと思い神戸ダルクの手伝いをさせて頂く事になりました。

まだまだ、回復途中中ではありますが精一杯仲間と過ごしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

れ、その様子は一部生中継で放送されました。依存症になるのは意思が弱いせいだ、回復できない、自己責任だと言った認識が、まだまだ強い日本社会において、素晴らしい動きです。

では、これで依存症を抱える人が助けを求められる・回復できる・地域の中で幸せに生きていくことのできる社会になるのでしょうか？ 私は、社会の理解を高めるためには、依存症を経験した本人や家族の声が絶対不可欠だと思っています。国の啓発イベントでも一部、当事者や家族の体験談が入っていますが、当事者や家族と、市民との接点を作ることの重要性から鑑みれば、その仕組みはまだまだ不十分であると感じます。ある物事を経験した人は、その物事についての生きた証であり、他の誰よりも感情を込めて、物語として話すことが出来ます。当事者や家族の物語から溢れる真実味と彼らの感情ほど、啓発において大きな影響力を持つものはないのではないかと思います。依存症についての「知識」なら情報の伝達で広めることが出来ます。しかし、依存症を抱える人や家族への「態度」や「行動」(例えば、日常生活の中で、あるいは支援場面で、どう接するのかということ)は、元々持っていた認識が覆されるような体験や、感情が伝わって同じ主観的世界を味わうと言った体験を経て、初めて変化し始めるのではないのでしょうか。実際に、様々なこころの病を持つ人への誤解や偏見、差別を減らす方法として、本人や家族の体験談を聞くなどの接触を持つという方法が有効であることは、複数の介入研究で言われています。

私は、このような考えから、依存症の体験談を社会に向けて話すことの出来る当事者や家族がもっと増えれば良いのに、そうすれば世界はきっと変わるだろうと思っていました。そこで、神戸ダルク施設長の梅田さんにどうしたら体験談スピーカーを増やせるでしょうかと気軽に気持ちで相談していました。その時、いつもならこのような企画に関心を持って意見をくださる梅田さんの反応が非常に鈍く、違和感が残りました。それから暫くして、梅田さんと話したり、実際に何度か学校等への講演活動に同行させていただく中で、依存症の体験談を社会に向かって話すことは、話し手への大きなリスクを伴うということを学びました。私は自助グループでの体験の分かち合いと、不特定多数の聞き手を前にした体験談スピーチを混同していたのです。自助グループという守られた空間では、自らの経験をありのまま話し、仲間から「分かるよ」と共感され、それは自分と仲間両方の回復の役に立ちます。しかし、啓発などの目的のために、不特定多数の人の前で体験談を話す時、聞き手との間に無条件の共感が生まれる保証はどこにもありません。そして、聞き手から賞賛もしくは批判のどちらかを浴びても、話し手は大きな感情の波を経験し、それは依存症再発につながることもあるということを私は後々知りました。

そこが出発点となり、今回、助成金をいただいて、「あなたの声を届ける 依存症を経験した人やその家族が社会に向けて体験談スピーチを行う際のガイド」を作成しました。このガイドの目的は、依存症を経験した本人やその家族が、自分たちの物語を、安心・安全に社会に向けて発信できるよう支援することです。内容としては、話し手の心の準備性/物語の組み立て方/スピーチ当日にできること/話し終わった後の過ごし方/支援者・イベント主催者にできること等を含んでいます。開発にあたって、アルコール、薬物、ギャンブル、性的な行動への依存症を中心に、摂食障害や自傷行為を経験した当事者および家族で、社会に向けて体験を話したことがある方々30名にインタビューへのご協力を頂きました。また、一部では、カナダで作成された、オピオイド系処方薬への依存を経験した人が、社会に向けてスピーチを行うことを支援するためのガイド“Strengthening speaking guide for people with lived experience of problems with prescription pain medication (Centre for Addiction and Mental Health 著)を引用しています。この冊子の最大の特長は、本文中に、当事者や家族の言葉をたくさん引用していることです。スピーチを引き受けるか迷った時、聞き手にどう思われるのだろうか不安な時、傷ついた時などに、ぜひ手に取って読んでみて頂ければと思います。先ゆく仲間の言葉には、読者の自己決定を導く道しるべ、すぐに役立つアドバイス、そして勇気の源が散りばめられていると思います。今年度は、この冊子の内容を活用した学習会を開催していく予定です。読者の方や学習会でのフィードバックをもとに、実用性汎用性の高い冊子に改訂していければと願っています。作成にあたり、インタビューでまさに宝物である経験を分かち合ってくださった皆様、カナダの Strengthening Your Voice の開発に携わられた方々、神戸ダルクの仲間やスタッフ、

この他、この冊子作成に携わってくださった全ての方々、そして公益財団法人日本社会福祉弘済会様に心より感謝申し上げます。



活動報告

2019年3月

群馬ダルク訪問
西宮市立西宮高校講演
関西地区 JCCA 会議開催
神戸保護観察所連絡協議会
有園基金選考委員会参加
賀川記念館講演
医療観察法ケア会議参加
食品衛生管理責任者講習参加
摩耶山登山
木口福祉財団交流会参加
加古川学園さん来所見学
ランチバスポートプログラム開始
B型作業所用店舗契約利用開始
寄り添い弁護士会参加
仲間の還暦パーティ開催
アドバイザー派遣報告会参加
リカバリーファーム開始
NA グループワークショップ参加
神戸市障害福祉課講習会参加
神戸自然の家 太鼓合宿開催
お花見 BBQ 布引の滝
王子公園桜の通り抜け参加

4月

京都ダルク VS ソフトボール
ホースセラピー見学
神戸自然の家 太鼓合宿パート2
スピリチュアルワークショップ参加
有園基金キックオフ交流会参加
キッコーマン工場見学
焼肉食べ放題・カラオケ
NA アウトリーチワークショップ参加
スウェットロッジ参加
兵庫県社会福祉協議会新任職員研修講演
JCCA 役員会議参加
瀬戸ジョブトレーニングセンター講演
治療共同体研究会参加
明石更生ネットワーク会議参加

アゲインファーム ボランティア 月2回
垂水病院メッセージ 毎月第3火曜日
垂水病院スマーブ 毎週金曜日
神戸保護観察所スマーブ講師 毎月1回
神戸ダルク家族会 毎月第4日曜日
明石保健所家族相談 毎月1回



近況報告・活動予定

今年は色々取り組みが多くなりそうです。それもスタッフや仲間たちがしっかりと育ててくれたからだと思っています。そして神戸ダルクフォーラムを11/23(土)に行うことも決まりました。助成金事業で、様々な取り組みも始まっています(次号で報告)

ここでは到底書ききれないので、次号で今年の取り組み特集をしていきたいと思っています。そのために次号は少し早めの6月中旬には発送できると思います。皆さんの支えが今まで以上に必要になってきます。どうかよろしく願いいたします。

神戸ダルク ヴィレッジ広報誌「Threshold」
年間購読のお願い

この広報誌「スレッシュホールド」の年間購読のお願いです。障害者低料第三種郵便物の取得が遅れており、皆様をお待たせしてしまいましたが、漸く第三種郵便物の取得ができました。年間購読費は年6回発行で2000円になります。お申し込みはFAX、電話、メール、または同封の振込用紙にてお願いいたします。お申し込みの際は「住所・氏名・電話番号」を必ず明記ください。

※ 配布用に、当ニューズレターを置いていただける場合はご連絡ください。たくさんの方に読んでいただけるように希望数を郵送いたします。私自身もこのような広報資料を見つけたことがきっかけで回復の場所を見つけることができました。ぜひ、まだ苦しむ依存症者の助けとなるようにご協力ください。

支援会員のお願い

神戸ダルク ヴィレッジでは、支援会員として、活動を支えてくれる方を募集しています。

兵庫県の薬物依存症者を助ける活動をご支援ください。
個人会員は1口 3000円(ニューズレター定期購読料を含む)からになります。刑務所内の方々との文通による支援のための切手代などに使わせていただきます。

ご連絡をお待ちしています。

領収書希望の方は一言ご記載ください

神戸ダルク ヴィレッジ

TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741

e-mail: kobe.darc@gmail.com

電話相談 来所による面談 メール相談
相談の内容に関する秘密は厳守します

逮捕・勾留中の方々への支援

刑務所・拘留所・留置所への面会、手紙などによる逮捕者及び保釈中の方への裁判での情状証人出廷や、刑務所出所者への薬物からの回復を希望する方の引受人としての指導対応や、出所前面談など、他機関と連携しながら対応しています。また、資料請求などもご連絡いただければ対応いたします。

★月曜～金曜 10:00～17:00

メールは24時間OK。 kobe.darc@gmail.com



神戸ダルクへのご献金・献品のご支援本当にありがとうございました。

開設から今日までをたくさんの方々に支えられてきたおかげで、仲間一同、回復のプログラムに取り組むことができています。心より感謝いたします。これからも暖かく見守ってください。

ご献金

高井省三様 真期澄夫様 幸地芳朗様 猪木より子様 阿部珠美様

ご献品

姫路薬師寮 施設長 國吉高虎様 群馬ダルク様 尾崎ひとみ様 竹川智恵子様 富田安世様 車谷憲隆様

(平成31年2月15日～平成31年4月10日到着分・順不同 ※購読料の方を含む)

献金・献品をお願いいたします。

いつもご支援いただき誠に有難うございます。毎回のお願いで本当に心苦しく思いますが、運営維持のためのご寄付及び、ご家庭で余っている日用品の献品をお願いいたします。

薬物依存症者への初期の支援は、様々な問題や面会、面談、訪問、手続き、会議などで追われてしまいます。が、そのような支援、さらに刑務所入所者、逮捕者への支援は、すべてボランティアに行われています。しかし、そのような支援が本当は一番大切であり、依存症者の回復のチャンスを絶やさないようにしたいと考えていますので、何卒ご支援のほどよろしくお願いします。

また、ご家庭で余っている食料品(米、野菜、乾物、味噌、醤油など)から洗濯洗剤やシャンプー、石鹸、などの日用品などがございましたら、神戸ダルクまでご献品ください。グローブ・自転車・農具などもございましたら是非送譲ってください。

ご寄付振込先口座 ゆうちょ銀行

口座番号 00950-9-275937

口座名 シヤ) コウベダルクヴィレッジ

店番 〇九九 0275937

献品の送り先住所 651-0068 神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ2F

一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ

編集後記

春はいろいろなことが起こります。毎日がドラマティックな神戸ダルクなのですが、薬物を使用していた時は、確かにドラマティックな出来事・事件ばかりでしたが、今のように、感極まったり、ウキウキしたり、一緒に目頭を熱くしたり、という日々ではなかったように思います。それはひとりぼっちだったからです。

これから外に出る機会も増えていきます。仲間が成長していることから、行動範囲も広がっていきます。私は子育て真っ最中なのですが、全く同じ心境になる時があります。転ばないように道を作るのではなく、転んだ時に差し伸べられる手をいつでも準備しておくことが、私たちには必要なのだと思う、今日この頃。感謝ばかりです。

神戸ダルク ニューズレター Threshold (出発点) Vol.12

編集人 一般社団法人 神戸ダルク ヴィレッジ 梅田靖規

印刷 プリントバック

〒651-0068 兵庫県神戸市中央区旗塚通 1-1-20 長坂ハイツ 2F

TEL 078-224-4244 FAX 078-219-9741

e-mail kobe.darc@gmail.com

www.kobedarc.org

価格 1部 100円 年会費 2000円

(購読料は年会費に入ります)

発行人 関西障害者定期刊行物協会

〒543-0015 大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4 階

Drug Addiction Rehabilitation Center

DARC